

2012年2月4日・5日
立命館大学アート・リサーチセンター
板本・板木をめぐる研究集会



板木から見る和本研究の重要性

誠心堂書店 橋口侯之介

板木研究の重要性

- 和本を知るために「板木」からアプローチする方法がもっと注目されるべきである。
- この場合、物としての板木が、出版権(板株)にかかわり、日本近世の特殊な出版形態を生み出したことと関係する。それが和本を調査する面で非常に有効である。
- 板木データベースができるなら、それと連携した画像を含めた「刊記データベース」の整備が望まれる。



板木収集と関連文書の整備

古書市場に板木がしばしば出てくる。

相場があってないようなもの。扱いにくいのが難点

「江戸時代後期から明治にかけての三大板木収集店」

- 大坂の河内屋喜兵衛は、膨大な求板活動をおこなってきたが、三木佐助の『玉淵叢話』に、大阪安土町のセリ市大会で売立をし、3日間かかったという逸話がある。以後、柳原書店として近代的な出版社に変わる。
- 江戸の浅倉屋も、かなり板木を集めたが、関東大震災でほとんど燃えてしまった。文書類も東京大空襲で焼けたという。江戸は全滅。
- 京都はよく残った。竹苞書楼(銭屋惣四郎)さんや法蔵館(丁子屋西村七兵衛)さんは自前の開板ものが多いのに対して、求板による板木集積の多かったのが、藤井文政堂(山城屋佐兵衛)さん。その刊記の入った本はよくみかける。それが奈良大学に納まったのは幸運なことだった。

板木由来の江戸時代出版用語1

- 刻 彫 鑿(せん。これだけ金偏＝板木を彫るための鑿) 上木
- 梓 上梓 梓刊 繡梓 ただし桜とはいわない
- 版も同音
板木＝版木 出板＝出版 板本＝版本

活字は、活版 活刷 活字排印 聚珍版など



板を使った出板用語2

- 板行(はんこう) 板木を彫って書物とする行為。
- 開板(かいはん) 書物を新たに板木に彫ること。
- 元板(もとはん) すでにできている板株。
- 板元(はんもと) 板株をもっている本屋。
- 類板(るいはん) 元板から模倣した書物。
- 重板(じゅうはん) 内容が同じものを無断で刻して出すこと。
- 再板(さいはん) 板木が傷んだり焼失したときの合法的な再刻。
- 蔵板(ぞうはん) 板木の所有。とくに寺院や素人の開板物。
- 絶板(ぜっぱん) 出版許可の出ない本の板木を焼却廃棄させること。
- 白板(しらいた) 薄墨で見本刷した板木。
- 板株(はんかぶ いたかぶ) 板木所有の権利。板木株とも。
- 丸板(まるはん) 全額自力で開板すること。丸株とも。
- 相合板(あいあいはん) 複数の本屋で共同出板すること。
- 板賃(はんちん、いたちん) 板木所有の割合に応じて出す償却費、配当。
- 焼板(やけはん) 板木が焼けて消失した本でも板株は存続する。
- 留板(とめいた) 相合・支配等で勝手に増刷させないように板木の一部を所有
- 求板(きゅうはん) 板木を買い求めること。



古活字版から整版へ移行する意義

近世初期、商業出版では、技術的に退化(戻った)したのでなく、新たな道が拓けたと考えるべきである。いったん活字印刷が入ったことで、かえって整版の良さを再認識したのだ。

活字にできない印刷法。活字では難しく整版が可能にした。読者層を広げる近世版本の特色

- これまで書き入れで対応してきた訓点、振り仮名をはじめから刷る。連綿によるかな書き、挿絵も整版だからこそその表現。
- 板木があれば容易に増刷できる(活字は組み直し、校正必要)。これが部数増となって収益を確保する。なにしろ板木は丈夫。二百年もった板木は数知れない。いま3,400年経ったものでも刷れる。興福寺の春日版の板木はもっと古い。内容が陳腐化しないことも重要。
- そこから一番大きな利点は、板木の所有が「出版権」(板株)となったこと。そうになると、それを売買することも、分割することもできた。

整版が主流になると

- 整版は初期投資に費用がかさむが、長期にわたって回収するという考えで出版できた。
- 版下代、板木彫り賃などの固定費を分散させること(相合板)の考えがうまれる。これは日本独自の特殊性となった。江戸後期では半数以上になる。
- 板木は十七世紀中から移動しているが、板株の確立は重板類板対策が明確になるまで下る。板木を売買する板木市もできる。古本の市と並立。
- これらの仕組みは江戸時代が進むにしたがって複雑になっていく。
- そのため、刊記に複数の本屋名が出てくるなど理解しにくくなっている。それぞれの本屋の役割を出版と流通の仕組みで理解することが、和本研究に不可欠。



事例:本居本／藤井文政堂板本文書から

- 文政12年(1829)2月に京都の本屋・銭屋利兵衛から著屋(めとぎや)勘兵衛に、宣長の著作ばかり十点、板木78枚が銀四貫五百匁(およそ金七十五両)で売り渡された。これらは伊勢の柏屋兵助と京都の銭屋利兵衛の相合の関係で出されたものだった。その銭屋の持ち分(大半は二分の一)が著屋に売られた。
- ところが著屋は翌文政13年10月にはそっくり山城屋佐兵衛＝文政堂ら六軒の本屋に六貫五百匁で転売した。十点セット以外に仏書の板木3点(勸化言々解、大光普照集、遠羅天釜)が加わった。
- 文政堂らは「本居講」のようにして六軒で持ち合った。半株を6等分するので、個々の店は全体の12分の一ずつの相合株を所有したことになる。
- 「丸板賃一匁 此板へ五分取」とあるように配当にあたる板賃が明記されている。



本居物10点

- A『字音仮字用格』 安永五年刊 丸板賃九分 これのみ三軒前 此板へ三分取
- B『国号考』 天明七年刊 丸板賃一匁 此板へ五分取
- C『漢字三音考』 天明五年刊 丸板賃一匁 此板へ五分取
- D『玉あられ』 寛政四年刊 丸板賃一匁二分 此板へ六分取
- E『玉銚百首』 天明七年刊 丸板賃四分 此板へ二分取
- F『玉銚百首解』 大平 寛政八年刊 2冊 丸板賃一匁八分 此板へ九分取
- G『菅笠日記』 寛政七年刊 丸板賃一匁八分 此板へ九分取
- H『神代紀髻華山蔭』 寛政十二年刊 丸板賃一匁六分 此板へ八分取
- I『真曆考』 天明九年刊 丸板賃八分 此板へ四分取
- J『大祓詞後釈』 寛政8年刊 2冊 丸板賃四匁 此板へ二匁取



伊勢の柏原兵助

宣長と親しく、その出版の実務を担った。ただし伊勢の本屋は全国流通させることができないので、本屋仲間への開板申請や添章入手のために銭屋と共同にした。権利は半分ずつ板木も半分を所有していた。

宣長の「著述書上木覚」に『大祓詞後釈』は「銭利柏兵相合板行」とある。

京都の銭屋利兵衛

- 銭屋利兵衛(華箋堂)は、宝暦ころから仏書・漢籍など幅広く販売してきた店。
- 安永3年頃寺町通錦小路上ル、寺町通仏光寺下ル(寛政8年)、寛政10年本に寺町通四条上ル、文化8年(寛政11)柳馬場東入る、後の富小路西入北川と移転多い。



「本居講＝本居相合中」

買った六軒の本屋は、その資金5貫目を紙屋利助から調達した。その借用証文(文政13年10月)に以下の店の名があった。

- 山城屋佐兵衛
- (文書切り取り)
- 橘屋嘉助
- 石見屋九兵衛
- 伊勢屋喜右衛門
- 田中屋専助

八戸市立図書館南部家本『玉あられ』(文政末から天保頃印)の刊記に。

- (柏屋兵助)
- 橘屋嘉助
- 伊勢屋喜右衛門
- 山城屋佐兵衛

〈三条通麩屋町東角〉

- 河南儀兵衛
- 石見屋九兵衛
- 河南宗助



藤井文政堂

文政年間の創業

蛸薬師通高倉西入る



三条通麩屋町東入

↓ (2代目)

寺町通四条下ル

↓ (3代目)

寺町通五条上ル(現在地)

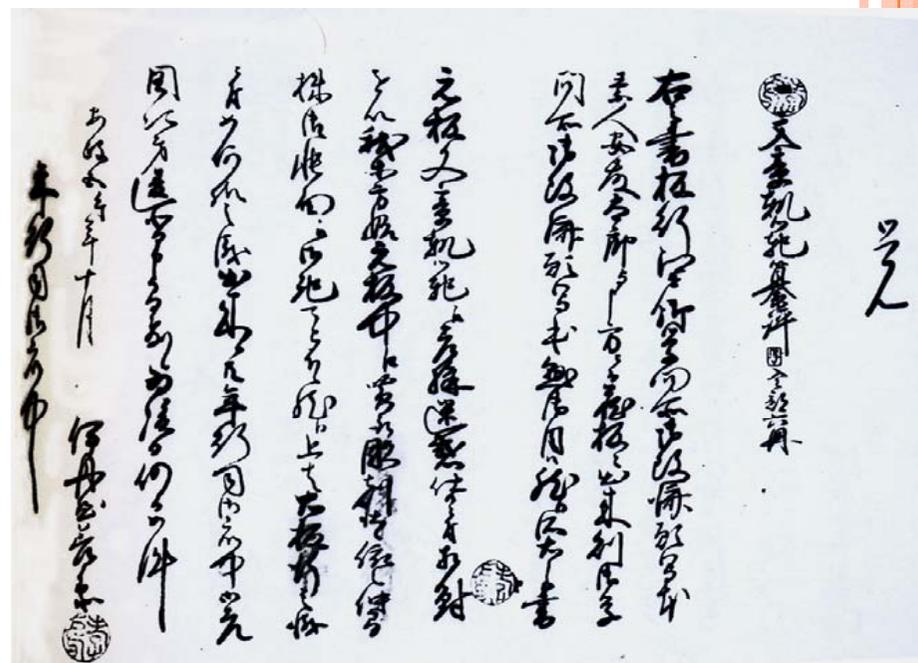
文久二年の文書には「相合惣代」として菱屋孫兵衛の名が出てくるが後から代わったもの。

- 天保3年(1832)、伊勢屋喜右衛門の分(12分の一)をおよそ600匁で買い取る
- 万延元年(1860)の「文政堂蔵板目録」に全体の6分の一(12分の2)の本居物板木を実際に所持していたことがわかる



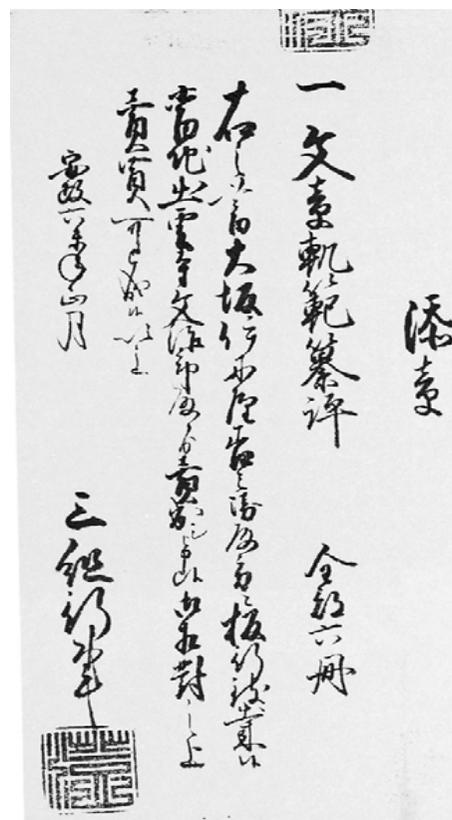
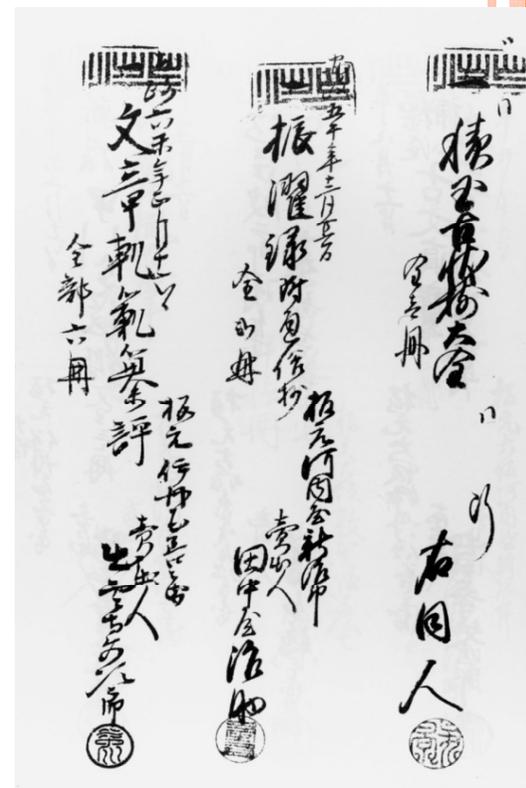
割印帳・添章の実例

- 大坂の本屋・伊丹屋善兵衛が安政5年(1858)10月に、『文章軌範纂評』の出版申請書(覚)が『大坂本屋仲間記録』「新板願出印形帳」にある(右図)。
- この本は大坂の学者・安藤秋里による『文章軌範』の注釈書。安藤は本書の出版に至る前に没してしまった。
- 大坂の「出勤帳」安政5年11月の条にも、この願いが出たことを記しており、それによれば、江戸にあった草稿本を伊丹屋が代金12両で譲り受け、それを元に開板したもので、よろしく認可してほしいということだった。「出勤帳」にはすぐ添章を発行したとある。

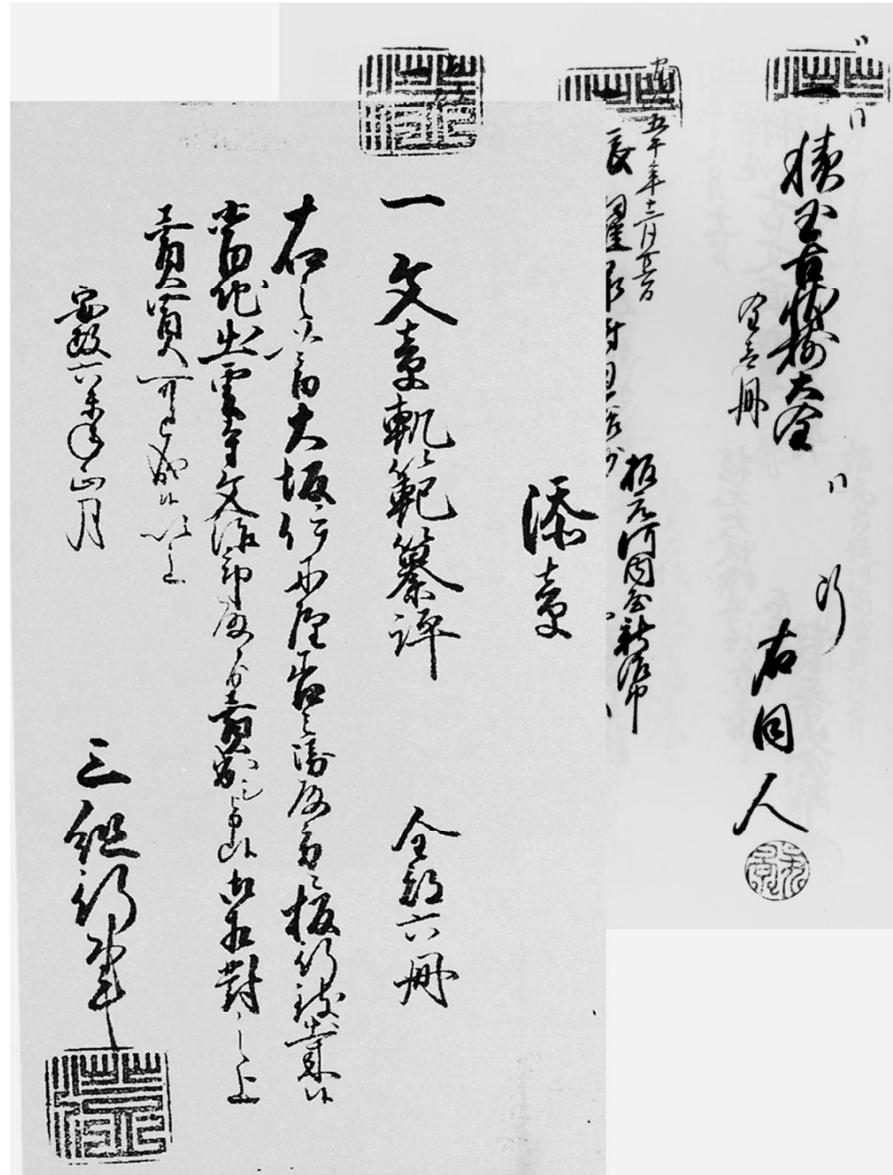


『文章軌範纂評』の割印帳と添章

- 右側は京都書林仲間の「他国版売出添章証文帳」(影印)の部分で、板元・伊丹屋の『文章軌範纂評』を安政6年正月、京都の出雲寺文治郎が当地(京都)で売り出し人として記帳されたもの。出雲寺の印が下に捺されている。
- それと印影が一致する添章が文政堂文書にあって(左側)、京都書林仲間の行事(三組行事)の名で、大坂の板元の本だが当地でも売買することができる」と書いてある。



割印帳と添章を重ねてみると



刊記データベースの必要性 刊記は優れた出版史料

- 長澤規矩也『和刻本漢籍分類目録』汲古書院、1976初版
板元名から刊印修を年代順に並べる
- 岡雅彦等編『江戸時代初期出版年表』勉誠出版、2011

個別には、

- 山本登朗『伊勢物語版本集成』竹林舎、2011
- 日下幸雄編『中野本・宣長本刊記集成』龍谷大学、2003

などが最近の役立つ刊記集

- 以前から『近世活字版目録』、『蔦重出版書目』、『松会版書目』など優れた実績もあるが、まだ書籍の段階で、個別にしか利用できない。これらをまとめてデータベース化することで、汎用的な利用が可能になる。
- 画像と刊記などの検索可能なメタデータをリンクさせ、インターネットで一般公開するのが望ましい。**史料の整備**となる。
- 板木データベースなど、「日本古典籍総合目録」を補完するインフラをつくって、より大きな「日本語の歴史的典籍のデータベース」構想が生きる。

参考文献

- 中野三敏『書誌学談義—江戸の板本』、岩波書店、1995
- 中野三敏監修『江戸の出版』ぺりかん社、2005
- 蒔田稻城『京阪書籍商史』1928

- 永井一彰編『藤井文政堂板木売買文書』青裳堂書店、2009
- 宗政五十緒『近世京都出版文化の研究』同朋舎、1992
- 鈴木俊幸『江戸の読書熱—自学する読者と書籍流通』平凡社選書、2007
- 橋口侯之介『江戸の本屋と本づくり—続和本入門』平凡社ライブラリー、2011

